

ヤコブソン作品における塑造される身体

梶 彩子（早稲田大学）

ソ連バレエの振付家レオニード・ヤコブソン（1904-1975）の代表作として挙げられるのは、バレエ『スパルタクス』（1956年）や小品「ロダン・シリーズ」（1958年）といった彫刻を参照した作品である。本発表では、同時代の彫刻を参照したダンスやバレエ作品を概観しながら、ヤコブソンの「彫刻を動かす」手法はどのような背景で生まれ、どのように変遷したのかを追い、舞踊芸術の彫刻への接近という文脈からヤコブソン作品における塑造される身体を再考する。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、彫刻と舞踊芸術は大きな接近をみせた。彫刻家はダンサーをモデルに動きの一瞬を作品にとどめ、反対にダンサーや振付家自身が彫刻作品を手掛けることもあった。特に重要なのは、モダン・ダンスにおいて、彫刻を参照したゆっくりとした動きが様々な舞踊家によって実践されていたことである（詳しくは、佐藤真知子「20世紀初頭の舞踊における『プラスチック』の概念」『演劇学論集 日本演劇学会紀要』、2021年、19-38頁を参照）。20世紀初頭ロシアにおいても、モダン・ダンスは短期間ながら爆発的なブームを起し、特に訪露公演を行ったイザドラ・ダンカンが熱狂的な人気を博した。ギリシア彫刻を参照し軽やかなチュニックをまもって裸足で踊るダンカンは、数多くの追随者たちを生み出し、その影響はバレエ振付家やダンサーにも及んだ。

バレエでは、M・フォーキンが彫刻作品からインスピレーションを得て創作を行ったほか、振付家カシヤン・ゴレイゾフスキー（1892-1970）もまた、バレエ『美しきヨセフ』（1925年）においてダンサーをたくさんの彫刻のように配置し、ダンサーたちのグループが生ける浅浮彫のようにひとつのポーズから次のポーズに流れるように形を変える演出手法をとった。

ロシアにおけるモダン・ダンスの流行は1920年代末にスタジオの強制閉鎖によって終焉したものの、閉鎖を逃れたダンカン・スタジオは、ダンカン亡き後もバレエの振付家らを招き、最終的な閉鎖を迎える1940年代末まで活動を続けていた。ヤコブソンもまた、1947～48年にかけて閉鎖直前のダンカン・スタジオに招かれて創作を行っていた。ヤコブソンが彫刻を参照するようになった明確な理由ははっきりしないが、フォーキンやゴレイゾフスキーといった先駆者たちからの影響に加え、ダンカン・スタジオでの経験もまた契機の一つと成りえたと考えられる。

ヤコブソンが彫刻を参照した作品を創作した

のは主に1950～60年代頃のことであり、確認が可能な範疇においては、キエフ劇場で1956年に初演されたバレエ『スパルタクス』がその初期作品に該当する。同作品では、古代ギリシア・ローマの壺絵や彫像、中でもとりわけペルガモン祭壇の彫刻にインスピレーションを得ながら、幕に映された浅浮彫が動き出す、あるいはダンサー自身が巨大なレリーフのごとく様々なポーズで静止し動き出すという演出が取り入れられた。『スパルタクス』はボリショイ劇場で1962年に新しい版が上演されるが、ここではスパルタクスの半生を浅浮彫でたどる演出が新たに導入され、彫刻と身体との関連がさらに強調された。

バレエ『スパルタクス』の他にも、1958年初演の小品においても彫刻を参照した作品を作っている。特に代表作として有名な「ロダン・シリーズ」（『永遠の春』、『接吻』、『永遠の偶像』）では、彫刻作品が静止したポーズから始まり、まるでダンサーたちが息を吹き込まれたかのように生き生きと動き出し、最後には再び最初のポーズに戻る。また、同時に初演された小品『死よりも強く』では、銃を突き付けられた3人のソ連脱走兵を描いた同名彫刻作品を参照し、その前後の物語（収容所を逃げ出し、看守に見つかり、絶命するまで）を自由なイマジネーションで補完した。

既存の彫刻作品を元に舞踊化する手法はその後「ロダン・シリーズ」において続けられるが、同時に、マヤコフスキー原作の同名戯曲を参照したバレエ『南京虫』（1962年）において、彫刻と身体の新たな関連が提示される。原作と異なり、ヤコブソンは舞台上に原作者マヤコフスキーを登場させ、マヤコフスキーは人形のように静止した登場人物の身体の諸部位を手にとって動かし、ポーズを取らせ、手本を見せるように踊ってみせるのである。登場人物たちは次第に生命を得たかのように動き出し、手本に倣って踊る。マヤコフスキーの創作過程は、通常連想される机に向かってペンを紙に走らせる作家のそれとは根本的に異なり、あたかも彫刻家が塑造するかのようであり、登場人物たちに新たな舞踊語彙を教え込ませる作家のその姿は、振付家の姿とも重なり合う。

このように、ヤコブソンはダンスやバレエのモダニズムに連なる形で、既存の彫刻作品を参照し創作を行ったほか、ダンサーの身体と彫刻とのつながりをさらに発展させ、『南京虫』において振付家と彫刻家の姿を重ね合わせながら、その創作プロセスそのものを作品に取り入れた。

本研究はJSPS 科研費（JP21J10531 および）の助成を受けたものである